

第 22 回 サセックス大学開発学研究所 (IDS) MPhil in Development Studies 2 年のコースを終えて

サセックス通信第 3 回に 27 期生の園田さんより 1 年目の Mphil コースの構成についての投稿がありましたが、同修士課程の 2 年目を終えるにあたって、「内部」の学生でなければ見えにくい視点から Mphil コースをご紹介できればと思い、投稿させていただきました。

先学期は IDS の Mphil への進学を考慮に入れておられる方々よりお問い合わせのメールを何通かいただいたこともあり、皆様の関心が高いと思われるポイントを何点か絞ってご紹介したいと思います。

学際的 (Interdisciplinary) な研究コースであるか？

答えは Yes であり、No でもあると思います。これは単純に学際的になりえる分野とそうでないものがあるからです。Mphil のコース自体は大きく分けて「経済学」「政治学」「社会学」「人類学」の基礎を学べるコースになっています (主に 1 年目)。ここから 2 年目はさらに課題別のコースへと移っていくのですが、農業経済学 (マイクロ) と参加型開発、環境問題と人類学・社会学、マクロ経済学と政治学、政治学と参加型開発などのテーマは非常に学際的に扱われており、IDS の MPhil ならではの感があります。しかし、たとえばマクロ経済学と参加型開発というのは学際的になりにくく、(また個人的な感想としては、その必要性があまりなく) マクロ分野で開発経済学を研究されている教授陣と参加型開発を研究されている教授陣の間にはほぼやり取りがありません。

地域専攻、学科専攻の困難さ

このコースは特に地域研究を主にしたコースではありませんので、ある特定の国について学びたいという方についてはやや不向きかもしれません。むしろコースでは地域間比較研究や、異なる国々、地域について学ぶことを推奨されます。(1 国の開発問題について、比較研究も含めいろいろな視点から分析されたいという方には向くかもしれませんが。)

また、関心分野がすでにある程度固まっておられる方 (教育、保健、ジェンダー、ガバナンス、農村開発、マクロ経済分析、貿易、金融といった特定分野について学びたい方) には Mphil はお勧めできません。サセックス大学内、IDS 内にもそういった特定分野に特化した MA コースが存在し、IDS の教授陣が講師として教えている場合もありますので、Mphil で学ぶ場合と同じ教授陣により、より専門性の高い研究ができる可能性があります。

実務的 (Practical) なコースであるか？

ここでは実務的 (Practical) であること、と理論の実践可能性 (Applicability, Feasibility) が十分に検証されているか、という二つを分けて考えることが重要だと思います。IDS の Mphil コースはプロジェクトマネジメントやプロジェクト評価法、実際の PRA 手法を学ぶコースではなく、むしろ後者の理論の実践可能性を鑑みた政策立案を重視するコースであると理解することが正しいと思います。その点では、理論一辺倒というわけではなく、基礎・応用の理論を踏まえ、それを実際の政策・プロジェクトにどう反映できるか、

また実際にそれらを実施する際にどのような問題点があげられるのか、などを中心に取り組んでいると思います。

ですが、これではなかなか「実務的」とはいいがたく(つまり政策・事業運営のノウハウに関してはほぼノータッチ)やはり理論から完全に離れるということはないと思います。

IDS、特に Mphil で学ぶ意義の高い課題 (教授陣(通常リサーチフェローと呼ばれる)の研究との関連性)

IDS には現在教授陣が構成する 6 つのリサーチグループがあり、基本的にはこのグループ内で共同研究や情報交換をすることが多いようです。Mphil の講義を教えるのはこの教授陣ですので、学際的とはいえ、自分の学びたいことと教授陣の研究が一致するかどうかをチェックするのも修士レベルでは重要かと思います。6 つのグループはそれぞれ参加型開発、貧困、グローバリゼーション、ガバナンス、環境、保健衛生で、このグループの研究テーマやそのグループ内の人数によってある程度 IDS の「花形研究」もわかるようになります。(あくまで私個人の独断ですのでご参考までに。各グループの研究詳細は IDS のウェブでチェックできますのでそちらもご参照ください。)

「現在」強い分野といえば、参加型開発と Rights-Based アプローチを中心にしたミクロの開発プロジェクト政策とマクロ政策(PRSP などでしょうか)ですね。近年はガバナンスのチームと参加型開発のチームのインタラクションが多く、特にこの分野では World Development Report 2004 のバックグラウンドペーパーにも多数文献を提供しています。アカウンタビリティの課題もまさしくこの分野の花形に該当します。

また環境破壊などを問題にした政策・プロジェクトへの人類学・社会学的なアプローチ(Livelihood アプローチ)はずいぶん熱心に研究されています。特に IDS 内で環境リサーチチームの教授が増えてきているのも研究の裾野が広がっていることを端的に示していると思います。

マイクロクレジットは今でも強い分野のひとつだと思いますが、いかんせんこの分野の著名教授 2 名が IDS にあまり出入りしておらず、上述の分野のようにまだ若い教授陣が意欲的に研究している、というのは幾分雰囲気なこととなります。

残念ながら保健分野、特に HIV/AIDS に関して、IDS は現在は非常に弱いといわざるを得ません。また金融資本市場に関してもラテンアメリカ以外の地域に関しては弱いですね。また、意外かもしれませんが統計分析を用いたハードエコノミクスは教授の数が年々減少しており、むしろ経済政策をややソフトな面から(純粋数字や回帰分析で論陣を張らず、政策意図や利害関係者のパワーバランスなどを考慮した形で)分析・提言する教授が増えてきているようです。

終わりに

以上、コースの内容を、経験者からの視点でコメントするように心がけましたが、皆さんの参考になれば

ば幸いです。「IDS の開発学修士」という看板からだけではわからない内部事情(!?)が反映できていればと思います。

さて、私個人はといえば、「援助」という公的資金と「貿易、投資」の民間セクターのダイナミクスが一国経済に与える影響を研究しようと考え、貿易自由化が貧困層に与える影響や、その支援政策の勉強から始め、現在最終的には民間セクター支援、特に中小企業支援においてドナーが果たす役割を研究しています。IDS の Mphil でなければならなかったか？と聞かれれば若干の「？」マークが残りますが、政策立案者と日常的に興隆しておられる教授陣に指導してもらえ、こと、「グローバル・バリュー・チェーンアプローチ」という IDS が重点的に研究している生産関係研究のフレームワーク (UNIDO で採用されています) を学べたことが大きなプラスになったと考えています。

2 年間の学生生活ももう終盤を迎えています、ここで学んだことを今度は自分が現場に活かしてフィードバックできれば、と考えています。

サセックス大学 IDS

開発学修士課程

山野真季葉